「モラ」手法を用いたテキスタイルの創作
―帯の製作―

松本　幸子

「モラ」とは、亜熱帯地域のパナマ諸島に住むクーナ族のインディオの女性が着用している民族衣裳に付いている「飾り布」のことである。この異国の服飾工芸手法である「モラ」について、その技法を調べ、日本の民族衣装である帯のテキスタイルとして「モラ」の特徴である布を重ねることや後から入れ込む方法が適していると考え、テキスタイルの創作を行った。完成した作品は、「モラ」の特徴である布を重ねることにより、適度な厚さと張りが得られ帯としての用途に適したテキスタイルとして活用できた。さらに日本紋様の表現のために布を入れ込む手法やアップリケ手法の上にのせる手法を行うことにより、模様の奥行や細部まで具体的表現が可能になった作品を完成できたと考える。

キーワード：モラ　テキスタイル　服飾工芸手法　アップリケ　クーナ族

1．緒言

クーナ族は、パナマ諸島のサン・ブラス諸島に住む、熱帯地方の民族である。そのインディオの女性が着用しているブラウスの前と背についている飾り布「モラ」手法の布を重ねることを活用して、帯のテキスタイルをデザインして、帯を製作することを試みた。

2．「モラ」の特徴と技法の概略

「モラ」の発達の経緯については次のような説明がなされている。十九世紀ごろ、他民族やマラリアなどの害虫を逃れてコロンビアからカリブ海沿岸のサン・ブラス諸島に移住したクーナ族であるが、その頃までは、ほとんど裸で暮らしていた。男性は腰に紐をまわし小布を下げ、女性は腰布一枚だけを着用していた。

身体は、顎から口唇まで入れ墨をし、男女ともに身体に明るい赤、黄、青で色彩をしていた[1, 2]。上半身、腕、股にジグザク文様や半円、三角形などを描いていた。やがて宣教師の影響か、十九世紀終わりごろには、ゆったりとした大きさの貫頭衣を着用し始めた。この服を着用することにより独特な服飾工芸手法が創り出されるきっかけとなった[2]。

また、クーナ族の身体的特徴を見てみると、男性は背が低く、胴長でカヌーでの移動のため足が小さく、上半身の発達が著しい。女性は、熱帯地域の民族に見られる均整のとれたスタイルの良さは見られず、男性と共に小柄な体型をしている。これらの身体的特徴をカバーし、装飾的で色鮮やかな、女性の民族衣裳「モラ」が生まれる要因になったと考えられる[3]。

この「モラ」は、鮮やかな赤、黄、オレンジ、緑などの布を重ね、上の布から切り込みを入れると黄色があらわれ、それらの布の縁をひと針ひと針丁寧にかがり、次に黄色の一部を切り込むとオレンジ色と、下から次々に色がわきでるような仕掛けである。いわゆる逆アップリケの形である。初期の段階では、この飾り布に頭と腕が通るような開口部をつけた貫頭衣を「モラ」と呼んでいる。現代では、それに衿あきと袖がつくブラウス形に変化している。

東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科

３．製作目的と意図

「モラ」の飾り布の手法である布を重ねることに注目して、和服帯のテキスタイルを創作し帯を製作した。帯は芯を入れて、製作することから、布を重ねても問題がない。また、紋様の細かい部分の挿し色も上から入れられ、日本の紋様を表現するにも適していると考え、帯により日本の文様表現を具体化することを目的とした。

４．作品について

まず、基本の手法を確認するために、半幅帯を二作試作として製作した。最初の図１半幅帯Ａは、「モラ」独特のモチーフ鳥と色彩感覚を参考に図柄のデザインと色鮮やかな色合いで色彩を決め、帯の前の部分と後は文庫結びにした場合を考慮して、模様を配した。「モラ」の方法は、上の布を下にくり抜いて行く方法と、その一部分に、はめ込み布を入れ込んでいく方法と、最後に形を切り取り、上からアップリケをする方法を組み合わせて、作品を製作した。

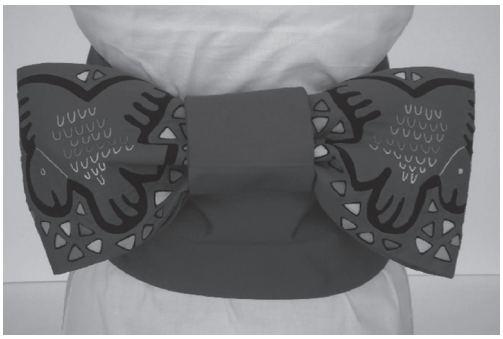

図１　半幅帯Ａ

次の図２半幅帯Ｂは、イギリスの神話童話の世界よりヒントをつかみ、日本模様にもある独自の繰り返し模様を作り出し、色合いも和風的に落ち着いた色彩を選んだ。繰り返し模様は、クーナ族では伝統的に魔よけの意味もあるようである。手法は、布を重ねてカットをし、たてまつりをし、さらに布を重ねて前のラインより大きく布をカットして、たてまつりをし、下の布の色を見えるようにする基本的な方法である。模様の配置は、前の二周目に巻く表に出てくる部分から後の結びをする最後のたれまでの間に模様を入れた。

図２　半幅帯Ｂ

これらの２点は基本の手法を手作業で仕上げた試作品で、これらを参考にして、今回は、さらに格上の名古屋帯を製作した。作業効率を考えて、ミシンを利用することにし、「モラ」部分のたてまつりの代用とした。またミシンを使用することを考えて、柄を決める段階で、直線でできた柄を参考に図案デザインを行った。

日本文様の正倉院御物に見られる菱紋の中から、菱形が重なる入子菱や、四つの菱形の組み合わせの割菱をもとに柄のデザインを決定した。

菱紋は、水草の一年草であるヒシ科のヒシの葉または、種を図案化されたものと言われている。また単純な図形のため発祥のプロセスはあまり明確にされていない。その中で大きく分けられている、「菱紋」と「唐花菱紋」の中から、図３－１「菱持」または「菱餅」と書かれる紋様と武田菱紋様が元の、図４－１「割り菱」と図５－１の「違い菱」を参考に図３－２図案Ａ、図４－２図案Ｂ、図５－２図案Ｃをデザインした。

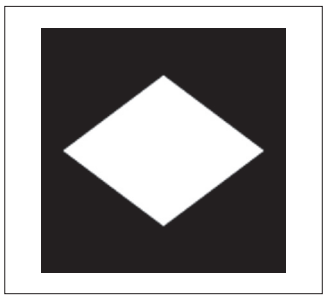

図３－１　菱持

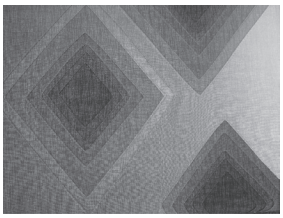

図３－２　図案Ａ

図４－１　割り菱

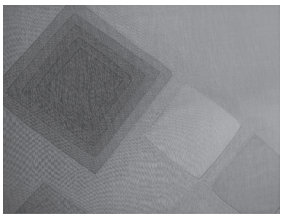

図４－２　図案Ｂ

図５－１　違い菱

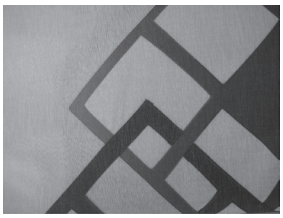

図５－２　図案Ｃ

図６名古屋帯作品Aは、中心から外へと徐々に大きな布を重ねて、大きくカットしながらまつっていく方法で、グラデーションになるように６枚の布が重なっている。また、長い布のため途中の剥ぎ部分では装飾となるようにラインとして違う布を挟み入れて、工夫した。さらに、お太鼓の部分とたれの部分の模様が繋がるようにデザインを行った。結果お太鼓の部分と前の部分に厚みができ、帯板など入れて着用するが、必要なくなる適度な張りが出たと考える。

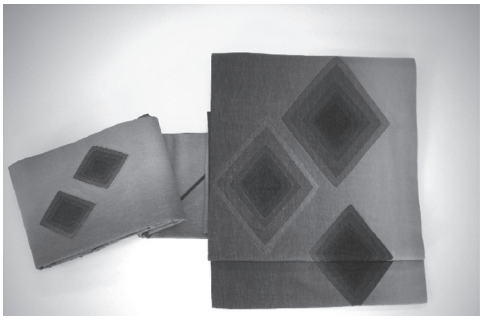

図６　名古屋帯Ａ

図７名古屋帯作品Bは、名古屋帯Aと同様な方法と布をカットした中に挿し入れて、違う色を入れ込む方法とアップリケの方法を合わせた手法を用いて、お太鼓の部分と胴にしめる二周目の前の部分に模様をデザインした。その結果布を上からアップリケの手法でのせる方法や、カットして違った布を入れることにより凹凸ができ、立体的な表現が得られたと考える。

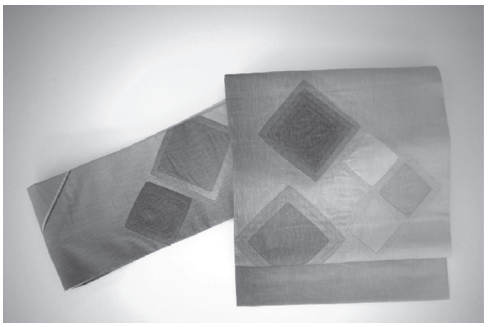

図７　名古屋帯Ｂ

図８名古屋帯作品Cは、色を入れ込む応用として、前の部分にグラデーションに違う色を挟み込んだ方法をとり、お太鼓の部分はアップリケの方法で布を重ねた面を作り出した。その結果違い菱の紋様をアレンジした柄が大胆に表現できたと考える。

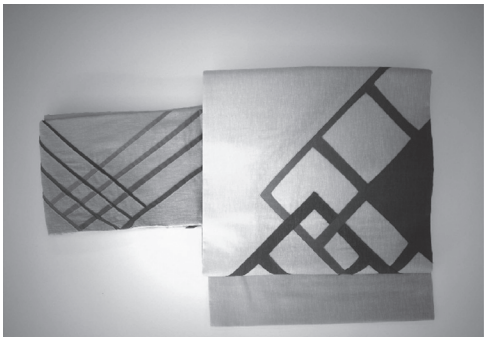

図８　名古屋帯Ｃ

名古屋帯３作品ともグラデーションを生かしたデザインを考えたため、今回は、既成のグラデーションの布を探し求め、それらを使用して、作品を仕上げた。他民族の服飾工芸手法を用いて、伝統的な日本の紋様とのコラボレーションができたと考える。また、「モラ」手法の特徴である布を重ねてカットすることを行うことにより、凹凸や適度な厚さが得ることができ、帯に適していることが分かった。

５　結語

パナマの服飾工芸手法「モラ」を活用して、日本民族衣装である、きものに欠かせない、帯を製作した。試作として製作した半幅帯を参考にして、３点の名古屋帯を完成させた。その結果、布を重ねて行う、「モラ」手法は帯製作に適したテキスタイル作りの方法として活用できることが実際の作品で実証できた。「モラ」の布を重ねて色を上に重ねていく方法や一部色を入れ込む方法などにより、模様の奥行き効果や細部にわたって、日本の伝統模様の表現が可能になったと考える。

また、素材によっては、この「モラ」手法は様々な作品に活かせる可能性があると考えられ、これからも他の作品の手法として、活かしていきたいと思っている。

謝辞

本稿は、2004年５月、2007年５月に行われた服飾文化学会第５回、第８回大会において展示発表した内容に加筆修正を致しました。

学会の先生方には、発表後ご助言をいただき大変作品の参考になりました。心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

１）梅棹忠夫:『世界旅行－民族の暮らし1－着る・飾る－民族衣装と装身具のすべて－』、pp22-23 日本交通公社出版事業局、1982
２）朝日新聞社：『世界の衣裳　シリーズ「衣の文化」①』、pp59-60 朝日新聞社編、1986
３）檜枝茂信：『モラ・サンブラスの芸術』　冒頭頁部分（株）　求龍堂、1973
４）松本幸子：『「モラ」手法を用いた帯の製作』服飾文化学会第５回大会研究発表要旨集、2004
５）松本幸子:『「モラ」手法を用いたゆかた製作』服飾文化学会第６回大会研究発表要旨集、2005
６）松本幸子：『「モラ」手法を用いた名古屋帯の製作』　服飾文化学会第８回大会研究発表要旨集、2007
７）中山富美子：『モラ手芸』日本放送出版協会、2001
８）中山富美子：『オリエンタルな刺しゅう』日本放送出版協会、1999

9）熊田知恵、森田萬里子、古松弥生、永井房子:『和服－平面構成の基礎と実際－』　衣生活研究会、1987
10）北村哲郎:『日本の文様』（株）源流社1988
11）『世界の衣裳　シリーズ「衣の文化」①』朝日新聞社編、1986
12）パナマの民族手芸モラ（MOLA）ホームページ http://www.hat.hi-ho.ne.jp/heart_thoughts/panama/mola.html（2004/02/24）
13）ウィキペディアフリー百科事典「菱紋」ページ http://ja.wikipedia.org（2013.3.10）

（受付　2013.3.27　受理　2013.6.3）